

Title	接尾語タシの成立過程 : タシ型形容詞の考察から
Author(s)	館谷, 笑子
Citation	語文. 1997, 69, p. 22-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68918
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

接尾語タシの成立過程

——タシ型形容詞の考察から——

はじめに

「タシ（タイ）」という形をとるク活用形容詞は上代から現代に至るまで存する。これらをタシ型形容詞と呼ぶことにする。⁽¹⁾このタシ型形容詞の語末のタシについて『大言海』では、

（た・し く・く・き・けれ）（形、一）痛し、甚しノ意ニテ、接尾語ノ如ク用キル語。ハナハダシ。萬葉集、二八「丹生ノ河、瀬ヲバ渡ラデ、ユクユクト、戀痛吾弟、コチ通ヒ来ネ」（戀ヒシキリニテ、強ク云フ）「憂たし」愛たし」コチたし」後めたし」

とされる。実際にタシには語或いは語の一部分が上接しており、接尾語のような働きをしていると言えよう。また、阪倉篤義氏は、ウレタシ（概哉此云于黎多乘加夜（三・115））なども、ウレフといふ語と思ひあはせるならば、タシといふ接尾語の存在が考へられるかもしれないが、あるいは、ウラとイタシといふ形容詞の複合ウライタシとも見られよう。⁽²⁾

と述べられ、ウレタシの語末タシが接尾語とも形容詞（イ）タシと

館谷笑子

も捉え得ることを示唆している。

一般的には、語末のタシは形容詞イタシに由来すると考えられており、例えば『小学館古語大辞典』のメダタシの項には「動詞『めづ』の連用形『めで』に形容詞『いたし』が付いて熟合した語で、『こひたし（＝恋ヒ痛シ）』、『あきたし（＝倦キ痛シ）』などと同じ構成である」とある。形容詞イタシは、

・ 魂は朝夕に賜ふれど（安我牟祢伊多之）恋の繁きに
（萬三七六七）
のように、上代から痛みを感じる様を表し、感覚形容詞に分類される。また、

・ 葦原中国者、伊多玖佐夜藝帝阿理那理。此一字以音。（記神武）
・ 埼玉の津に居る舟の（可是乎伊多美）綱は絶ゆとも言な絶え
（萬三三八〇）
それ

のように、物事の程度が甚だしい様を表す例も上代から見られる。この甚だしいという意は物事の程度を表すが、元は痛みを感じさせるほどに激しくひどい様を表しており、潜在的に感覚を表すと言えよう。また、この用法は次第に副詞化し、現代では文章語でしか用

いられない。

タシ型形容詞の中には、この形容詞イタシが下接した「一十イタシ」という語構成のものが、母音の連続を避けた結果「一タシ」という形になったものがある。例えばウレタシ・メダタシがそれであり、本来は名詞ウラ・動詞メツの連用形メデそれぞれに痛い意或いは程度が甚だしい意を表す形容詞イタシが付いたものと考えられる。しかし、タシ型形容詞の全ての語についてこの説明が可能なわけではなく、語末のタシが形容詞(イ)タシでなく接尾語と考えられるものも存する。語末のタシが形容詞(イ)タシであれば、平安時代に入ってイ音便が一般化すると、母音の連続を避けない「一イタシ」の形で形成されるようになると見られ、タシ型形容詞の形成は母音の連続を避ける時代に限られるはずである。しかし、実際は近代に入っても新しいタシ型形容詞が形成されており、全てのタシ型形容詞の語末が形容詞(イ)タシだと考えるのは適当ではない。つまり、一部の語のタシについては接尾語と捉えられるのではないが、形容詞イタシから接尾語タシが成立したのではないかと推察されるのである。そこで、本稿ではタシ型形容詞の形態面、特に上接部の語構成要素が独立的か非独立的かに注目し、接尾語タシの成立について考察していきたい。

なお、タシ型形容詞の中に「一ポッタイ」「一ベッタイ」という形をとるものも存する。例えばアツポッタイ・ハレポッタイ、ウスベッタイ・ヒラベッタイ等である。このポッタイ・ベッタイのポツ・ベツが何に由来するのかが明らかではないので、「一十ポツ／ベツ」＋「タイ」と捉えることも、ポッタイ・ベッタイ全体を接尾語とみなして「一十〔ポツ／ベツ＋タイ〕」と捉えることも可能である。

従って、これらの成立過程については別に考える必要があり、本稿ではこれらを考察の対象から除くこととする。

一 「独立的要素＋形容詞イタシ」

先ず、名詞・動詞連用形といった独立的要素に形容詞イタシが付く語とその用例を挙げる。

【名詞】

ウレタシ ……庭つ鳥鶏は鳴く〔宇禮多久母〕鳴くなる鳥か…

… (記神代)

コチタシ 〈許智多鷄波〉をはつせ山の石城にも率て籠らなむ

な恋ひそ我妹 (常陸国風土記 新治郡)

コトタシ 韓衣裾のうちかひ逢はなへば寝なへのからに〔許等

多可利都母〕 (萬三四八二 或本歌)

ネタシ ほとときす〔伊登祢多家口波〕橘の花散る時の来鳴き

とよむる (萬四〇九二)

ウシロメタシ しばく行きけれど、猶いとうしろめたく、さ

りとて、行かではたえあるまじけり。 (伊勢物語 四十二)

ラウタシ この妻にしたがふにやありけむ、らうたしとおもひ

ながらえとゞめず。 (大和物語 六十四)

これらはいずれも中古までに用例が確認でき、母音の連続を避けた結果「一タシ」という形になったものである。³⁾

ウレタシは、心を意味する名詞ウラに痛い意の形容詞イタシが付いたものである。ウラは主に接頭語として用いられるが、ウラモナクという形でも用いられ、独立的要素として扱ってよいだろう。

コチタシ・コトタシは同様に、名詞コトに形容詞イタシが付いた

ものだが、コトは言葉或いは事柄の意、イタシは痛い或いは甚だし
い意のどちらとも考えられる。コトタシはコチタシの東国方言と考
えられるが、コチタシの場合は先行母音が、コトタシの場合は後行
母音が脱落したために語形に違いが生じたと思われる。

ネタシについては、『小学館古語大辞典』に「な(名) いた
(痛)し」の約で、相手の名(評判)が高くて、自分に痛く感じら
れるの意か」とある。また、内田賢徳氏も語構成的な内部に形容詞
イタシの要素を見ることの妥当性を指摘されており、名前や評判を
意味する名詞ナに痛い意の形容詞イタシが付いたものと捉えられる。
ウシロメタシはウシロへ(後方)イタシ或いはウシロメ(後目)
イタシの母音イが脱落したと解する説があるが、ウシロへ・ウシロ
メが単独で用いられた用例は確認できず、確かな根拠はない。一方、
ウシロメタシよりも遅れてウシロメヤスシという語が『狭衣物語』
に見られる。

・御ため目やすしとまでこそ思されざらめ、たださる方に後目
安く心安き方には、
(狭衣物語 四)

また、この直前にあるようにメヤスシという形容詞が平安時代中
期から多く見られる。

・右大将殿のばかりぞ、かたち・心目安く、参上りなども、し
ばしばせらるめる。
(宇津保物語 菊の宴)

このことから考えると、ウシロメヤスシに対応するものとしてウ
シロメタシがあり、「名詞ウシロ+名詞メ(目)」に痛い意の形容詞
イタシが付いたと捉えることができよう。

ラウタシは、漢語名詞ラウに基だしい意の形容詞イタシが付いた
ものだが、タシ型形容詞の上接部に漢語名詞をとるものはラウタシ

のみである。名詞ラウは単独の用例も多く存し、当時一般的に用い
られた語であったため語構成要素となり得たと思われる。
また、同じく中古から用例が確認できるもので「イタシ」の形
のものも見られる。

カタハライタシ 源宰相うちみあはせたまへば、いとかたはら
いたしとおもひて、ものもの給はず。
(宇津保物語 嵯峨の院)

この語は「カタハラが痛い」意であり、二語扱いすべきかとも思
われるが、イ音便の一般化に伴って母音イが脱落しなかった、或い
は上接部の音節数が多いため複合度が弱かったと考えられるので、
タシ型形容詞に準じて扱うこととする。

【動詞連用形】

コヒタシ 丹生の河瀬は渡らずてゆくゆくと(恋痛吾弟)いで
通ひ来ぬ
(萬一三〇)

フリタシ 凡ならばかかもせむを恐みと(振痛袖乎)忍びて
あるかも
(萬九六五)

メデタシ 御門、なほめでたく思さる、事せき止めがたし。
(竹取物語)

アキタシ さしあたりで見むには、わづらはしく、よくせずは、
飽きたき事もありなや。
(源氏物語 帯木)

名詞の場合と同様、いずれも中古までに用例が確認できる。また、
いずれも甚だしい意の形容詞イタシが付いたもので、メデタシ以外
は用例数が少ない。

第一例第四句の「恋痛」は、萬葉集古義や萬葉集評釈ではコヒタ
ム、萬葉集全註釈ではコヒカタキ、西本願寺本ではコヒイタムと訓

まれているが、多くは日本古典文学大系や萬葉集全注のコヒイタキ、萬葉集略解や澤瀉注釈のコヒタキで訓まれており、動詞コフの連用形にイタシが付いたもの、或いはそれが母音の連続を避けた結果コヒタシとなったものと解されている。「恋することが甚だしい、激しく恋している」意を表していると考えられることから、一例のみではあるがタシ型形容詞に含められる。

第二例第四句の「振痛」は従来フリタキ或いはフリイタキと訓まれる。動詞フルの連用形に形容詞イタシが付いたものが母音の連続を避けてフリタキになったもので、「袖を振る動作が甚だしい」ことを表すと考えられる。従って、これも一例のみではあるがタシ型形容詞に含められる。

また、同じく中古から用例が確認できるもので、「イタシ」の形をとるものも見られる。

アマエイタシ 今はあまえいたくて、まかり帰らんこともかたかるべき心ちしける (蜻蛉日記 中)

クンジイタシ いかにしはべらまし、屈しいたくこそ。(蜻蛉日記 下)

ウモレイタシ 「いでや」とは、思しわづらひながら、いと、あまりむもれいたきを (源氏物語 柏木)

アキレイタシ なげきつる心ちども、あきれいたきまでおもひよるこびたること、たとへむかたなし。

(浜松中納言物語)

これらは、二語扱はずべきかとも思われるが、名詞の場合と同様にイ音便が一般化した後の用例であり、上接部の音節数も他の動詞連用形の場合と比べて多く、更にイタシが甚だしい意で用いられて

いる点でタシ型形容詞と共通しているので、タシ型形容詞に準じて扱うこととする。

このように、タシ型形容詞の中で、「独立的要素+形容詞イタシ」の形のは全て平安時代までに用例が確認できた。また、その多くは母音の連続を避けた結果「イタシ」の形をとっており、その一方で、母音の連続を避けない「イイタシ」の形も平安時代中期以降見られるようになることが分かった。

二 「非独立的要素+形容詞イタシ」

次に、名詞被覆形や動詞語幹といった非独立的要素に形容詞イタシが付く語とその用例を挙げる。

【名詞被覆形】

ツメタシ 女の衣も引き著せ給ふに、ひとへもなくて、いとつめたければ、 (落窪物語 一)

ツメタシはツメイタシの母音イが脱落した形と考えられている。しかし、名詞ツメが上接する他の複合語はツマサキ・ツマハジクのように「ツマー」という形をとることから、ツメの被覆形ツマに痛い意の形容詞イタシが付いたと考えるほうが適當だろう。従って、上接部は非独立的要素と捉えられる。

【動詞語幹】

ネプタシ とまりて独寝し給ふころ、いかにねふたからずおはすらむと思ひたてまつりて、 (多武峯少将物語)

ケプタシ 火取どもあまたして、けぶたきまであふぎ散らせば、 (源氏物語 鈴蟲)

ネプタシ・ケプタシは、従来動詞ネブル・ケブルの連用形ネブリ

・ケブリに形容詞イタシが付いたネブリイタシ・ケブリイタシから母音イが脱落してネブリタシ・ケブリタシとなり、更にリが促音化を経て脱落したものと考えられてきた。⁷⁾しかし、そのような二段階の音の変化を経ていたのであれば、ネブリタシ・ケブリタシの用例が見られてもよいはずだが、そのような例は確認できない。そこで考えられるのが、動詞ネブル・ケブルの語幹ネブ・ケブに基だしい意の形容詞イタシが付いたネブイタシ・ケブイタシから母音イが脱落したという一段階の変化である。ネブル・ケブルという動作が甚だしいと感じるのではなく、ネブリ・ケブリの情態が甚だしいと感じる様を表すという意味から考えても、上接部は動詞語幹と捉えるほうが適切だと言えよう。

なお、この上接部ネブ・ケブは形容詞ネブシ・ケブシの語幹とも考えられそうだが、形容詞ネブシ・ケブシの用例は第三節で挙げられるようにネブタシ・ケブタシの用例よりも時代が下るので不適切である。

このように、「非独立的要素+形容詞イタシ」のタシ型形容詞は平安時代中期に三語見られるようになり、いずれも形容詞イタシと同様に感覚を表している。また、これらは母音の連続を避けた結果「―タシ」という形をとる点でも共通している。

三 「非独立的要素+接尾語タシ」

これまでは、タシ型形容詞の語末のタシが形容詞(イ)タシと考えられるものを挙げてきたが、次に、形容詞イタシが母音の連続を避けて「―タシ」となったのではなく、上接部に直接タシが付いたと考えられる語について見ていきたい。

先ず、非独立的要素にタシが付いた語とその用例を挙げる。

【形容詞語幹】

オモタシ 「袋など、あくるだにあやししくおもたきかな」

ヒラタイ おもひなしか、はやおなつ腰つきひらたくなりぬ。
(堤中納言物語 虫めづる姫君)

ヌクタイ 銀札の降日 ぬくたい物が降るとこく
(好色五人女 一)

三語とも中世以降にしか用例が確認できないもので、そのうちの二語は近世以降の用例しか見られない。

オモタシの例は平安時代の用例とみなすべきかとも思われるが、

これ以外の確例が『虎明本狂言』まで下ることと、土岐武治氏が「虫めづる姫君」物語は鎌倉期の成立で、ほゞ古事談・宇治拾遺物語・十訓抄などと同時代(二二二―二二五二)の成立ではなからうか⁸⁾とされていることから、鎌倉時代の用例と考える。

オモタシについては『日本国語大辞典』の補注に「語源については、『重甚(おもいたし)』の変化したものとする説があるが、断定しがたい。」とある。鎌倉時代に母音の連続を避けて母音イが脱落するとは考えにくく、『角川古語大辞典』にあるように「おもし」の語幹に接尾語「たし」が付いた語」と捉えるほうがよいと思われる。つまり、オモタシが用いられる鎌倉時代にタシ型形容詞の語末のタシが接尾語化したと考えられるのである。

また、オモタシとオモシは類義関係にある。これらの意味の違いは、オモタシのほうがオモシよりも重量感を伴う点だとされる。例えばオモシは

・此比は付物、年を送て過差ことのほかになりて、よろづのを
もき物を多く付て、
(徒然草 二百二十一)

のように実感を伴わなくとも用いることができるが、オモタシには
このような例が見られない。つまり、オモシの語幹に感覚を表す形
容詞イタシに由来する接尾語タシが付くことよつて、実際の感覚
を伴つた重さを表したのがオモタシだと考えられる。

ヒラタイもオモタシと同様に、先に形容詞ヒライが存在した。

・役ハヤリノヒライヤウナ物ソ
(毛詩抄 七26オ)

このヒライの語幹ヒラに接尾語タイが付いたのがヒラタイである。
ヒライ・ヒラタイの場合は両形での意味の差があまり見られず、ヒ
ラタイが勢力を拡大していった結果、ヒライが用いられなくなつた
と思われる。

このようなオモシ・ヒライからオモタシ・ヒラタイが成立したの
とは逆の関係も見られる。

・つぼひなう青裳 つぼひなふつぼや 寝もせひで眠かららふ
(閑吟集二八一)

(閑吟集二八一)

・「これサお三や、そんなに薪ばかりくべて、やたら吹竹で吹
ては煙くつてならねえ。
(魂胆夢輔譚 初篇中)

のように、タシ型形容詞ネブタシ・ケブタシの上接部ネブ・ケブに
形容詞をつくるシが付いて形容詞ネブシ・ケブシが成立したと考え
られる。このことから、オモシ・オモタシ、ヒライ・ヒラタイの関
係は他のタシ型形容詞にも影響を及ぼしたことが察せられる。

ヌクタイは、この一例しか見られず、方言の可能性もあるが、

・次 アタゝカナルヲヌクシトイヘル (名語記 三42ウ)

・一 あたゝかなることを〇ぬきといふはよろしと云り〇ぬ

くときもよしと云り

(かた言 五)

のように形容詞ヌクシが存し、「形容詞語幹ヌク+接尾語トシ」と
解されるヌクトシも見られることから、形容詞ヌクシの語幹に接尾
語タイが付いたと考えてよいだろう。

このように、「非独立的要素+接尾語タシ」の形をとるタシ型形
容詞は、第一・二節で扱つた語と比べると用例の確認できる時代が
下り、鎌倉時代以降に見られるようになることが分かる。鎌倉時代
以降に母音の連続を避けて「トタシ」となつたとは考えられず、「ト
イタシ」の形をとるものも新たに形成されないことから、上接部に
直接タシが付いたと考えられる。つまり、鎌倉時代には形容詞イタ
シに由来する接尾語タシが成立したと言えるのである。

四 「上接部+接尾語ツタイ」

鎌倉時代に接尾語化したタシは、近世に入ると、促音を伴つたツ
タイという形でタシ型形容詞を形成するようになり、上接部には非
独立的要素だけでなく独立的要素もとるようになる。

【名詞】

ハバツタイ たて髪は天につうじ、ぜんせいの羽織は此界に
はゞつたく、
(野郎にぎりこぶし)

ヌルマツタイ 俺ら方の井戸見てえに柄杓で汲み出すやうなん
ぢや、ぼかぼかぬるまつたくつて
(土〈長塚節〉十九)

ハバツタイの上接部は、幅があるように感じられる様を表すこと
から、名詞ハバに接尾語ツタイが付いたと考えられる。

ヌルマツタイのヌルマが何であるのかについては問題があるが、
・ぬるまつこいラムネを濁いた喉へ通した。

(黒猫〈龍胆寺雄〉四)

のように、同じ上接部ヌルマに接尾語コイが付いたヌルマツコイという語形も見られる。また、ヌルマユという名詞があるが、

・喰たならぬるまがあるまがとひやう母い

(川柳評万句合 明和六年・松三)

のように、ヌルマだけでヌルマユを表す例も見られる。従って、上接部のヌルマは名詞扱ひすることができ、それにツタイが付いた語と捉えておく。

【動詞連用形】

ジレツタイ じれつたく師走を遊ぶ針とがめ(柳多留 初編)

ジレツタイは、下一段活用動詞ジレルの連用形に接尾語ツタイが付いた語と考えられる。

このように、上接部には非独立的要素だけでなく独立的要素もとるようになったが、非独立的要素のものに關しても、その範圍が広がっており、動詞・形容詞語幹に加えて形容動詞語幹も見られるようになる。

【動詞語幹】

クスグツタイ 今日一日、よつてはゐるけれど、此やうな小益

では、少しくすぐつたいやうじや。(遊子方言 堯端)

クスグツタイはクスグリタイのりが促音化した可能性も考えられるが、ここでは動詞の語幹と捉えておく。

【形容詞語幹】

イキグチツタイ IKIGUCHITTAI—KU イキグチツタイ adj. (coll.)

Suffocating. (和英語林集成 三版)

イブツタイ 「此りや燻つてえ」と復沈んだ儘「し」と垢を

落として居たが、

(土〈長塚節〉上)

シブツタイ 蠟燭を吹消したあとの、洪つたいやうな異臭がただんだん薄らいで行くと共に、

(波〈山本有三〉)

これらは、類義の形容詞イキグチシ・イブシ・シブシが存在し、その語幹に接尾語ツタイが付いたと考えられる。

【形容動詞語幹】

イヤツタイ はご板で下女いやつたく追つかける

(柳多留 十編)

ヤボツタイ ちゑない子にちゑつけぬしの髪は内でゆふかどうもやぼつていぞ

(古今三通伝)

これらの上接部イヤ・ヤボはいずれも単独の感動詞・名詞として用いられるよりも形容動詞として用いられることのほうが多く、ここでは形容動詞の語幹と捉えておく。また、形容動詞の語幹は動詞・形容詞の語幹と比較すると独立性が高いが、独立して用いられないという点を重視して、非独立的要素に含めることとする。

このように、近世以降には「非独立的要素+接尾語ツタイ」の形の語だけでなく、「独立的要素+接尾語ツタイ」の形の語も形成されるようになり、接尾語としての形成力が拡大したことが窺える。また、上接部の性格に係わりなく、近世以降に見られる語のほとんどが「ツタイ」という促音を挿入した形をとっている点も注目される。この促音は、クスグツタイをクスグリタイの促音化したものと捉えれば、これが「ツタイ」の原形かとも思われる。

以上のように上接部を分類してタシ型形容詞の用例を挙げたが、この分類にはあてはまらない上接部を有する語が見られるので挙げておく。

【その他】

ヒラタクタイ なるものじや お手がかかるるとひらたくとう

(軽口頓作)

シルクタイ 這樣しるくたい所へ見えたらば、とろゝの中へ雷
が落たやうにござんせう (応神天皇八白幡 一)

ナマヌルクタイ 男「エ、なまぬるくたい。サアやらうめ、出
てうせちやア。」 (統膝栗毛 十編下)

ヒラタクタイ・シルクタイ・ナマヌルクタイは「形容詞語幹十ク
タイ」という形をとる。方言には「クタイ」という語形が他にも
見られ、また、

・ 払底じやのジラタイのと流行言葉の片言雜り

(当世真々之川 一)

・ やれくく^ウい^ルきたいくく^ルと^サ手巾にて只ぬくひつゝ入り来るを
見れば (温泉の垢)

・ 日終、テキナイ、ゴシタイばかり、もだへくるし^シみもが^シ給
ふ。 (父の終焉日記)

・ がい^シにやぶせつ^ルたくく^ルぜりこ^クくな (統膝栗毛 八編上)

のように、近世の文献には方言や特殊な位相で用いられたと考えら
れる語が存するので、「クタイ」が方言である可能性もある。し
かし、先に述べたように、近世以降に成立するタシ型形容詞の大部
分が「クタイ」という促音を挿入した形をとることから、このク
は促音の替わりに挿入されたと推察することができる。

このように、鎌倉時代に成立した接尾語タシは、近世以降に「ク
タイ」という促音を挿入した形で勢力を拡大していったことが確
認できた。

五ま と め

これまで上接部の語構成要素に注目してタシ型形容詞全体を見て
きた結果、時代を追って上接部の性格が変化していることが分かっ
た。その推移を示したのが次の表である。この表の平仮名表記の語
は形容詞イタシの母音イが脱落していないものを示している。

近代	近世	中世	中	古	上	代	
						名詞	動詞連用形
ヌルマツタイ	ハバツタイ			ウシロメタシ ラウタシ かたはらいたし	メデタシ アキタシ あまえいたし くんじいたし うもれいたし あされいたし	ウレタシ コヒタシ コチタシ フリタシ	ツメタシ
	ジレツタイ				ネブタシ ケブタシ		
	クスグタイ						
	ヒラタイ ヌクタイ イキンチタイ	オモタシ					
イフツタイ シブツタイ	イヤツタイ ヤボツタイ						

この表から、第一・二節で見てきたように、複合形容詞と捉えら
れる「独立的要素+形容詞イタシ」のものとは上代或いは中古から既
に用例が見られるが、「非独立的要素+形容詞イタシ」の形式は中
古に入ってから見られるはじめ、派生形容詞と捉えられる「非独立的

要素＋接尾語「タシ」のもの中世以降になって形成されるようになることが確認できる。この変化はタシ型形容詞の変遷という視点で捉えると、タシ型形容詞の上接部の語構成要素が独立的なものから非独立的なものに変化し、複合形容詞から派生形容詞へ変化していると言えよう。一方、語末の「タシ」に注目すると、これまで述べてきたように、形容詞(イ)「タシ」が平安時代中期頃から接尾語的性格を帯びようになり、中世になって接尾語化し、近世以降は促音を挿入した「ッタイ」という形で形成力を拡大したという、接尾語「タシ」の成立という視点からも捉えることができる。

この接尾語「タシ」と同様に独立して用いられる形容詞が接尾語化したものには、他にナシ(甚)、コシ、トシがある。ナシ(甚)については岩村恵美子氏が、ナシ(甚)型形容詞とナシ(無)型形容詞と形容詞ナシ(無)の補助言用法とを上接部の品詞的性質という形態的な側面から検討されている⁽¹¹⁾。それによると、上接部が名詞・居体言の場合はナシ(無)型形容詞、形容詞連用形・断定の助動詞ナリの連用形の場合は補助用言のナシ、形容動詞・形容詞語幹等の情態を表す独立的でない要素の場合はナシ(甚)型形容詞と説明できるとされ、ナシ(甚)型形容詞のナシは形容詞ナシと関連するものと述べられている。従って、ナシ(甚)型形容詞も、時代的な変化は見られないにしろ、タシ型形容詞と同様に「独立的要素＋形容詞ナシ」という複合形容詞から「非独立的要素＋接尾語ナシ」という派生形容詞へという語構成面での変化があったと言える。

コシについては『常陸方言』で「詞ノ尾ニ添ハリテ、甚シキ意ヲ含メリ、濃ノ字ノ意ニヤアラン」と接尾語の働きがあり、形容詞コシ(濃)に由来することが指摘されている。『日本国語大辞典』に

は、形容詞コシが接尾語化し、濃い意が薄れたものと、ク活用形容詞の語幹と語尾との間にコが挿入されたものとがあるという指摘がある。また、トシについては、山田忠雄氏がスルドシの成立に関連するススドシを動詞ススムの語幹に形容詞トシが付いたものと捉えられている他は⁽¹²⁾、あまり考察の対象とはされていない。しかし、コシ・トシとも、その上接部が独立的要素から非独立的要素へと変化しており、タシ・ナシ(甚)と同様に形容詞から接尾語化したものと考えられる。クサシ・タルシも勢力が弱いものの同様に捉えられようである。

このように、(イ)「タシ・ナシ」をはじめとする形容詞は、上接部が独立的要素から非独立的要素に変化するのに伴って接尾語化するという共通性が認められる。

おわりに

以上のように見てきた結果、単独で用いられる形容詞「タシ」が上代から上接部に独立的要素を伴って複合形容詞となり、その語末「タシ」が平安時代中期頃から徐々に接尾語化して上接部に非独立的要素を伴う派生形容詞を形成するようになったことが明らかになった。また、これと同様の過程を経て接尾語化する形容詞が他にも見られることも指摘した。

最後に、これまでに扱ったもの以外の形容詞をつくる接尾語について触れておきたい。第五節で指摘した語以外で、独立して用いられる形容詞が接尾語の働きも有するようになった代表的なものには、ガタシ・ニクシ・ヤスシ等がある。しかし、これらの上接部は動詞の連用形に限られている。従って、タシ・ナシ(甚)が接尾語化す

る前の複合形容詞の段階と言え、同じ接尾語として扱われてはいるものの、タシ・ナシ(甚)とは語構成の面で明らかな違いがあることが分かる。

つまり、形容詞をつくる接尾語は、語構成面に注目すると次のように分類できる。

A、独立した形容詞としての働きを持つもの

(a) 上接部に独立的要素をとって複合形容詞をつくるもの

(b) 上接部に非独立的要素をとって派生形容詞をつくるもの

B、接尾語としての働きの持たないもの

A (a)にはガタシ・ニクシ・ヤスシや接尾語化したタシ・ナシ(甚)・コシ・トシ等があてはまり、A (b)には接尾語化したタシ・ナシ(甚)・コシ・トシ等があてはまる。Bにあてはまるのは、独立しては用いられない接尾語ガマシ・ラシイ・ツポイ等である。これらは、従来、接尾語として一括されていたが、このように、接尾語自体の独立性と上接部の独立性といった二つの側面から形容詞をつくる接尾語全体を分類することが可能であり、機能面で違いがあることが明らかになる。

注

(1) マタシも語末にタシをとるが、このタシは形容詞イタシに由来するとは考えられず、除外する。

(2) 『語構成の研究』第三章第二篇(角川書店 昭41・3)

(3) 母音の連続を避ける場合、一般に先行母音が脱落するが、タシ型形容詞ではメデタシのように後行母音が脱落する例のほうが多い。これは後行母音イが最狭母音であることに起因すると思われる。また、ウレタシのように先行母音と後行母音とが合わさって別の母音に変化する例も見られる。

(4) 『古事記の「文」』(古事記研究大系10『古事記の言葉』 高科書店 平7・7)

(5) これは、古活字版のみに見られ、内閣文庫本ではウシロヤスシとなつている。

(6) この語末のタシについては、日本古典文学全集・萬葉集全注・萬葉集私注・日本古典集成・萬葉集古義等で願望の助動詞タシの最古例と解している。しかし、助動詞タシは平安時代末から見られることや、形容詞イタシの意で解釈できることから、助動詞タシではないと考える。助動詞タシについては別稿を期したい。

(7) 小林芳規氏「助動詞たし」『国文学解釈と鑑賞』22 | 11 昭32・11、森野宗明氏「助動詞タシの源流私見」『文学語学』17 昭35・9)等。

(8) 『堤中納言物語の注釈的研究』(風間書房 昭51・5)

(9) ジラタイは厚かましい意、イキタイは蒸し暑い意、ゴシタイは疲れてだるい意、ヤブセッタイはうるさくて煩わしい意を表す。

(10) 他に方言にはタシ型形容詞が多く見られる。例えば

アクベタイ・アラクタイ・イキスタイ・イキバツタイ・イブセツタイ・エグタイ・イジクタイ・オンソクタイ・キズメタイ・コンベタイ・コチヨバタイ・シミタイ・ダリタイ・プシヨツタイ・ヘスタイ・ヤセツタイ

等がある。

(11) 「ナシ(甚)型形容詞——否定性接尾語を有する形容詞の考察——」

(大阪大学『語文』64 平7・9)

(12) 「形容詞スルドシの成立」(『日本大学文学部研究年報』4 | 3 昭

28)

—— 本学大学院博士後期課程 ——